

〔連載⑩〕

現代社会解体新書

第10回 現代海外見聞録

DAS ジャパン

萩原 睦幸

私は仕事から海外に行くことが多く、さまざまな国でいろいろな経験をさせていただいています。若いころは韓国、中国、シンガポール、インドネシアなどの東南アジアの国々がほとんどでしたが、最近ではイギリスやフランスをはじめとした欧州の国々にかけています。それにしても、まだ飛行機が飛んでいない幕末から明治にかけ、当時の若者が海外に出かけて行き、諸外国のトップとさまざまな交渉をしたなんて信じられない思いです。長い船旅もなんのその、強い野心に駆られての行動だったものと推察します。中でも明治初期、陸軍軍医としてドイツに留学した森鷗外は有名で、当時のベルリンの寄宿先が現在は記念館として一般に開放されています。

今年は東日本大震災の影響で全体に自粛ムードが高まり、海外への渡航者がかなり減少したようですが、最近の顕著な円高に刺激され、渡航者がまた増え始めているようです。

さて海外旅行といえば、昔は限られた人々しか行くことができず、まさに人々の憧れそのものでした。また、たとえ行くことができても外貨の持ち出しに500ドルと制限があり、とても現地で自由に行動できる状況ではありませんでした。それが変わり始めたのは、1970年代からです。ジャンボジェット機などの飛行機の大型化やドルが変動相場制に移行したからで、1988年にはアメリカへの渡航はビザが免除されるに至りました。

その後海外渡航者は増加の一途を辿りますが、2001年のアメリカ同時多発テロ事件や、2003年のSARS流行などで一時減少してしまいます。しかし現在では盛り返し、年間海外渡航者数は延べ1500万人にもなるといいますから、まさに時代の変化を感じます。特に最近の傾向は、20代の若者の渡航者が減少する代わりに、50～60代が激増

しているとのことで、ここ2～3年で一斉に定年を迎えた団塊の世代が、海外旅行にも影響しているものと思われます。

●東南アジアは？

皆さんご存知のように、中国や韓国は同じ儒教の国ということもあって、日本とよく似ています。街並みもよく似ているし、顔かたちも見分けがつかないほどなので、街中を歩いていても日本にいるような錯覚を持つこともあります。以前韓国でのこと。韓国の友人とタクシーに乗ったら、私が韓国人で友人が日本人だと間違われたことがありました。台湾にも友人がいるのですが、彼は独学で日本語を学び、お互いに日本語でスムーズに会話ができました。驚いたことに、こんなに日本語が堪能であるにもかかわらず、最近まで一度も日本に来たことがないとのことでした。昨年、やっと念願がかない来日し、かねて望んでいた京都と鎌倉を私が案内しました。台湾の人々は日本が大好きなようで、特に若者は、シブヤとアキバにあこがれているとのこと。タイやベトナムにも日本を尊敬している人々がたくさんいます。昨今の日本のメーカーの工場進出で、ますますその関係が深まり、日本の技術力の高さと、面倒見の良い人間性が受け入れられた結果だと思われます。

数年前に私は韓国、台湾、タイなどの国々でISO講演をやらせていただきましたが、その歓迎ぶりに感激しました。台湾では受講者が目の前で私の著書を次々と購入され、サイン攻めに会ったり、記念写真を懇願されたりと、とてもうれしい思い出があります。

●欧州は？

一方、欧州はどちらかというと成熟した国々が

多いせいか、何となく大人で落ち着いた雰囲気があります。それによりの国々も歴史や古い建造物をとても大切に、しっかりと保存する国民性が根付いています。ロンドンでの街中の車やバスの渋滞は日本以上ですが、住民はあまりイライラせず、平静そのものです。実は古い道路は旧世紀のままで、新興都市以外はむやみに開発が許可されていないからです。歴史と伝統のある街並みをそのまま保存し後世に伝えようとする国の施策が十分生かされています。日本で



いえば室町や江戸時代の建造物に今なお人々が住み続けていることになり、まさに驚きです。住民は日常生活をする上でいろいろ不便を感じるのとことですが、それよりも伝統の建物を当たり前前に大事にする考え方に脱帽です。

日本のように住宅の寿命は30年といっばからない国は、環境の面からいっても大罪を犯していることになり、大いに見習うべきでしょう。もうひとつ、街中の夜の明かりが実に効果的なことです。日本みたいなきらびやかな光りではなく、やわらかい光のイメージです。日本は震災後、節電できらびやかな光がかなり少なくなりましたが、欧州はもともとこれと似た生活スタイルをずっと続けてきました。それも当たり前。これは環境に関心が深い国々が欧州にいかにかの証明でもあります。

●生活習慣は？

海外旅行で、トイレで困った日本人は少なくありません。清潔で便利なウォシュレットなどは、日本以外にはどこにもないことを覚悟しましょう。だいいち公衆トイレの少なさには泣かされます。ある日フランスの地下鉄の駅で、トイレの場所を駅員に尋ねたところ、嘘か本当かわかりませんが、どこにもないというではありませんか。きっとどこかにはあると思われませんが、この対応には困りました。またほとんどが有料で、男女が一緒のところもあり、プライバシーもなにもあり

ません。

イタリアの公衆トイレもきわめて数が少ないのに困惑させられました。ところが、中に入ってみるとそのスペースは優に2人分もあるのです。どうしてもっと利用者のことを考えて数を増やさないのか、実に不思議です。コンビニやスーパーの数も日本と比べたら、雲泥の少なさです。しかも一晩中営業しているところは、ほとんどありません。自動販売機もめったに見かけません。何か買い忘れたらアウトで、翌日店がオープンするまでじっと待たなければなりません。ホテルのレストランもあまり遅くまで営業はしておらず、ある店では閉店時間のかなり前に追い出されてしまいました。聞けば従業員が早く帰宅したいがためのようで、顧客満足からは程遠い振る舞いでした。また、欧州では駐車に対して人々は無関心です。大都市こそ大きな駐車場が必要なのですが、路上駐車が当たり前です。おかげで道路の3分の1は死にスペースとなり、渋滞に拍車がかかっています。

一方、タイやシンガポールなどの東南アジアの国々は、観光客向けに遅くまで開いている店も多く、これらの国々は日本では人気が高く、シーズンを問わず日本人が大挙押しかけています。タイの国内などを車で移動していると、至るところに日本のメーカーの看板が掲げられ、この国との親密さが実感させられます。タイは東南アジアで他国から侵略されていない唯一の国で、国民にはタイ王国としての誇りがあるようです。郊外には川

本のメーカーの工場が多数ひしめき、日本人技術者のもとで、多くの現地人が働いています。そのせいか日本人の人気は高く、日本からの観光客は上客として大事にされ、この国へリピートで行く日本人はますます増えています。

●語学力は？

海外旅行ではどうしても語学力が必要になります。団体のツアーで行く場合は、ほとんど必要ありませんが、個人やビジネスで渡航する場合には、まったくちんぷんかんぷんでは話になりません。やはり世界共通の言語である英語は、片言でもいいから身に付けておくべきでしょう。日本人は英語を話す前にどうしても構えてしまう傾向があります。話して通じなかったらどうしよう。主語と述語は逆ではないのか。この程度の英語では相手にバカにされないか。ポキャブラリーの不足で会話にならない。などなど。

実は本場イギリスの英語も、かなりいい加減なところがあります。特に話し言葉の場合は、用件を伝えたり感情を表現したりするのが目的ですから、主語や述語、文法の並びなどはほとんど無視してしゃべっています。こちらもキーワードさえわかれば、お互いのやり取りの中で今何が問題かは理解できますので、どうにか返事は返せます。もっとも私はビジネスで行く場合にはいい加減な対応はできませんので、現地の通訳をあらかじめ用意しますが、昨今日本語が乱れているように、最近の英語もかなり変わってきているように感じます。昔教科書で習った言い回しでは、相手はきっと堅い論文を読んでいるように聞こえるかも知れませんね。

また、欧米のネイティブの英語はなかなか聞き取りにくいものです。時々キーワードさえわからない場合もあり、このような場合はゆっくりと話してもらうしかありません。そこへ行くと東南アジアの国々の英語は、もともとネイティブではありませんから、私どもの英語と似たり寄ったりで、何をいわんとしているかは大体理解できます。

いずれにしても、日本人の語学に対する「羞恥心」は捨てるべきです。相手に話しかけられて何も返せないのは、失礼だし何かと誤解されるもと

にもなります。単語を並べても通じなかったら、身振り手振りでフォローすれば、どうにか相手に通じるものです。

同じテーマでお互いに話し合っているわけですから、通じないはずはないと考えることです。こちらがネイティブに発音できないのは相手もわかっています。もし外人から片言の日本語で話しかけられた場合、彼が今何を求めているかが何となくわかるのと同じです。

●治安は？

海外旅行では、行く先々の国々の治安状況をあらかじめチェックしておくことはきわめて重要です。ましてやビジネスではなく観光で行く場合には、わざわざ治安状況が悪い時に行くのは絶対避けるべきです。現地にいても気が落ち着かず、観光どころではないでしょう。私の英国行きも、たまたま市内バスのテロ事件に遭遇し、渡航を断念したことがあります。

今まで先進国の治安はほとんど問題ないとされてきましたが、2001年のアメリカ同時多発テロ事件後から、世界のどこでテロに巻き込まれるかわからない状況になってしまいました。テロばかりではありません。世界のニュースを見ていると、最近の世界同時不況やリビアの独裁政権崩壊など、国民の不満は頂点に達していて、何時どこの国のどこで暴徒化するかもわかりません。

事故や事件に巻き込まれるのは、ちょっとした気のゆるみなどから起きてしまうことが少なくありませんが、特に海外で行動するときには、見知らぬ土地で周囲の状況もわからないわけですから、前後左右を常に確認し、一にも二にも慎重な行動が求められます。

フランスやイタリアの地下鉄も、夜遅い時間に乗るのは危険です。車内のいたるところに落書きがあり、観光客狙いの若者があちこちたむろしているのを目のあたりにしました。私はインドネシアでもひたたくりに遭遇し、バイクの2人組に襲われました。肩にかけたリュックを奪われそうになりましたが、力づくで奪い返し幸い事なきを得ました。大事なパスポートでも奪われたりしたら、旅行どころではなくなってしまうところでした。

●海外経験からの収穫

いつも思うのは、帰国時にまずはほっとすると同時に、いかに我々は恵まれた国で生活できているかを実感することです。トイレの便利さもさることながら、コンビニやスーパーは何時でも開いていて、何でも好きなものを自由に買って、深夜でもあまり治安を気にすることはありません。震災で多少の制限はあったとしても、水や電気は何不自由なく使え、世界一便利な国に住んでいることをあらためて感じます。

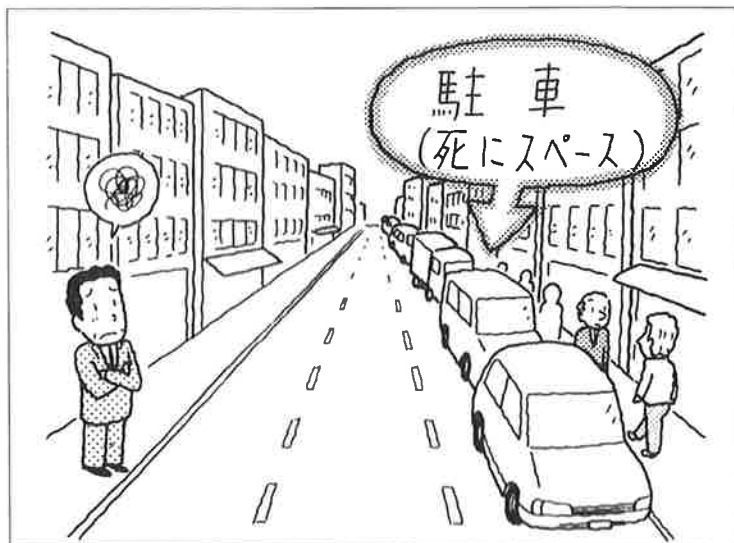
またいろいろな見聞が広まるせいか、普段小さな島国でいかに些細なことにこだわり、生活しているかの反省もしきりです。逆に海外に出るのは、今の勝手気ままで自由な生活から離れて、不自由な生活はどのようなものかを体感できるチャンスともいえます。

幕末から明治にかけ、数千人の若者が海を渡りました。みな開国という大きなうねりの中で、世界で何が起きているかをこの目で知り、日本もそれに負けない国にしようとの決意から生まれたものでした。世界を知ることは、逆に日本を客観的に評価できることにもつながります。今若者の海外離れが叫ばれています。ある若者は、「確かに昔のように海外の情報が乏しかった時代には渡航する意味もあるが、現在のようにあらゆる世界のできごとや情報がインターネットで入手できてしまう時代には、無理して渡航する必要性は薄れた」といってはばかりません。しかしこれは本当でしょうか？

単なるインターネット上ではなく、現地へ出かけて行き、この目で見て、その地の雰囲気や匂いを体感することで、初めて現実を理解できるのではないのでしょうか。

●グローバル社会

為替の変動や一国の大きな災害が世界の国々に大きな影響を与える時代になりました。サプライ



チェーンにより、ひとつの製品が、多くの国々の協力のもとに製造されているからです。外見は「made in Japan」ですが、実態は海外がほとんどで、日本で製造されたものはわずかに過ぎない製品が少なくありません。今後日本も、さまざまな規制緩和を突き付けられ、諸外国の技術者・労働者が大量に入ってくるのが予想されます。そのためには、諸外国の動きや考え方を前もって知り、国際感覚を身に付けた人がこれからの時代は必要でしょう。日本は今まで同質性が強すぎました。もちろん良い面があったことも事実ですが、これからのグローバル社会を考えると、この同質性は足を引っ張る可能性が大です。ユニクロや楽天のように、最近グローバル企業に大きく舵を切った元気な企業が出始めています。

もともと資源を持たないわが国は、さまざまなことをグローバルに展開してこそ、発展の余地があります。日本の高度な技術を武器に、世界をまたにかけたトヨタやコマツなどのようなグローバル企業がもっと存在してもよいと思います。これからの社会は、経験と多様性を兼ね備え、どのようなことにも即座に対応できる人材が求められています。まさにグローバル企業の採用条件と重なります。

執筆者

萩原 睦幸(はぎわら むつゆき)

DASジャパン株式会社 代表取締役

TEL : 03-6666-0501 FAX : 03-6666-0594

Email : info@das-japan.jp